

本学の教育に関するヒアリングについての報告

学生部キャリアサポート課

ヒアリングの概要

2025 年 9 月 22 日に卒業生が複数在籍する企業（メーカー）に対し、本学の卒業生に対する教育に関するアンケート結果を踏まえたヒアリングを実施した。本学キャリアサポート課のスタッフが協力企業を訪問し、採用関連業務を担当する 2 名の社員の方にご対応いただいた。

ヒアリングを行った企業

本社を都内に置く産業用印字・表示機器の総合メーカー。印字機、ラベラー、印字検査機に加え、資材供給・ラベル制作・受託加工・保守までを一貫して提供することに強みがある。全国の営業・技術拠点を通じて食品・医薬等の表示ソリューションを展開し、食品メーカー向けサーマルプリンタの取り付けに高い実績がある。現在 4 名の卒業生が在籍しており、2025 年は夏期インターンシップに本学学生を受け入れていただいた。

企業への趣旨説明

本学の教育活動を改善し続けるために自己点検・評価を行っている。そのために学外のステークホルダーからの評価を受け、それを教育活動に反映させていく。資料に基づき、主に以下の観点から評価をしていただく。

【資料】 卒後 3 年アンケートによる本学の学びの評価

1. 3 つのポリシーを踏まえた教育の成果について
2. 清泉女子大学が輩出する卒業生について
 - 資料から読み取れる傾向や、勤務している卒業生を念頭に置いて気づいたところ。
 - 大学として意識して育ててほしいと思うところ。
3. 学習内容の可視化とその活用について
 - ディプロマサプリののような学習の可視化は採用や社員教育の役に立つか。
4. 生成 AI の活用について

1. 3 つのポリシーを踏まえた教育の成果について

清泉女子大学における 3 つのポリシーに (<https://www.seisen-u.ac.jp/overview/information/education/3policy.html>) 基づく学習状況について、本学の卒後 3 年アンケート（以下、卒後アンケート）を基に説明を行った。入学時・在学中・卒業時の各段階におけるポリ

シーがあり、特にディプロマ・ポリシーは学位授与の条件として重要であることを理解いただいた。在籍中の卒業生を念頭に意見交換を行った。

全体的な印象として、学生が他の女子大学と比較しても伸びやかに学生生活を送っている様子があるとの指摘を受けた。ご担当者には学内を複数回ご訪問いただき、学生の日常的な活動やクラブ活動の様子をご覧いただいている。

一方で、卒後アンケートの文学部 DP4 に関し、「言語等によるコミュニケーションの能力を備え」に関連し、本学の特徴である外国語学習については、学習成果の社会的活用機会に一定の限界があるとのこと指摘をいただいた。外国語運用に限定した項目ではないが、卒後アンケートでは、英文科・西文学科の達成度がやや低めであり、配属によって外国語活用の機会や期待値が大きく異なる点が背景として挙げられた。卒業後には英語やスペイン語のスピーキングをさらに学びたいと振り返る声も多く、社会人としての学習意欲が見られる一方で、成果発揮の機会に制約があることが示唆された。

2. 清泉女子大学が輩出する卒業生について

近年入社した卒業生を含め、若手社員全般に関する意見交換を行った。卒後アンケートの大学 DP4 「多様な立場や考え方が交錯する中でも対話を続ける姿勢」に関連し、アンケートの結果では低めの評価が見られたが、実際に勤務する卒業生については「周囲の意見を丁寧に聴き、受け止めた上で発信する姿勢」が評価され、業務に大きく貢献していると伺った。採用現場や学内で接した学生の印象とも整合しており、特段の問題はないとのことであった。

一方で、周囲に過度に配慮し、場の空気を読みすぎる傾向も見られ、場合によっては消極性につながる可能性があるとの指摘もあった。長所である一方、留意すべき点であると考えられる。

3. 学習内容の可視化とその活用について

学生の学習成果を可視化し、採用や教育現場で活用できる資料となり得るかについて意見交換を行った。この企業では採用選考時に大学での学びを重視し、面接では「何を学び、どのように取り組んだか」を深掘りしているとのことであった。学生が自らの学びを自分の言葉で語れるかは評価に直結する。成績証明書に加え、PBL やフィールドワーク、日常的なレポート等の学習成果物は有益であり、積極的に参照したいとの意見をいただいた。

一方で、本学の学生や教員は日常的な学習が、学外での評価につながるという認識を持つことができていない。そのため、日常の学習成果を蓄積・可視化していくことが、教育と社会をつなぐ上で重要であると示唆された。2025 年度より導入した学生生活支援システム「学びのあゆみ」は、成果を蓄積しディプロマサプリメント等の形で可視化する機能を備えている。今後は、ショーケース機能等を用いるなど、学生が自ら学習成果を発信できる仕組みを早期に運用することが望まれる。

4. 生成 AI の活用について

近年急速に普及する生成 AI（ChatGPT 等）の活用についても意見交換を行った。大学においては学習プロセスに、企業においては事業活動に影響を与えるツールとなっている。

近年のインターンシップでは、学生がグループワークの中で自然に生成 AI を利用し、報告書のイラスト作成や内容のブラッシュアップに活用している事例が見られた。教育活動として特別に強調せずとも、学生は自ら適切な利用方法を学んでいると考えられる。

一方で、生成物の適切性については利用者自身に判断力や基礎的素養が求められる。許容されない利用との境界も明示的に教育する必要がある。大学としては、生成 AI の善悪二元論にとどまらず、適切な活用法を身につけさせる教育的取組が求められる。

5. まとめ

本ヒアリングにより、企業のご担当者から本学教育の成果と課題に関して貴重な示唆を得た。本学学生は伸びやかに学生生活を送り、周囲の意見を尊重する姿勢が評価されている一方、外国語活用機会の制約や協調性の過剰傾向が課題として指摘された。また、学習成果の可視化は採用選考に資するものであり、日常的な学びを蓄積・発信する仕組みの早期整備が求められる。さらに生成 AI の利用については、学生の主体的活用が進む一方で、適切な判断力を養う教育的支援が不可欠である。これらの知見は本学の教育改善と人材育成に資する重要な指針であり、今後の自己点検・評価に着実に反映していく必要がある。

以上